

## 2014 習志野市青少年海外派遣事業

## サザンホスピタリティに抱かれ充実した日々

東邦大学付属東邦中学校・高等学校（高校英語科主任）長瀬 明雄

7月24日から8月6日までの2週間のタスカルーサ市訪問が無事終了しました。どれほど充実した研修であったかは参加生徒の感想文で十分わかると思いますので、私は今回の事業に携わっていただいた縁の下の力持ちの方々の功績を中心に、タスカルーサ市訪問を回顧します。

振り返ってみると、今事業はさまざまな方々にサポートをしていただいたからこそ成功であったと改めて実感しております。企画・立案の段階は習志野市役所・教育委員会、習志野市国際交流協会の方々本当にご尽力いただきました。改めて感謝の気持ちでいっぱいです。別々の学校の生徒が集い、海外派遣事業を展開しようという、その発想自体が非常に情熱を必要とするものであり、そこに至るレールを敷いていただいたことに感謝しきれないほどです。

そして参加生徒のオリエンテーションでは、習志野市国際交流協会 NI-Youth のみなさんの援助があったからこそ、市内4校の高校生が打ち解け、一致団結できたのだと思います。一番最初のオリエンテーションはアイスブレイクでした。大学生の先輩方がうまく導いてくれたおかげで、面識のなかった高校生同士が学校の枠を超え、まるで入学時から同じ学校の生徒であったかのごとく、親密さを増していきました。その後も NI-Youth の先輩たちに、タスカルーサ市の高校生と交流を図る際に有益な情報、例えば日本を紹介するときの情報を提供してもらえたのですが、その一つ一つを生徒たちは積極的に学習→発表と繰り返していました。そうした力を引き出してもらえたことは本当に幸せなことです。その姿を見るにつけ、この生徒たちは絶対にタ

スカルーサ市訪問でうまくいく！と私は確信していました。

今回参加した生徒のタスカルーサ滞在中の活動ぶりを見て、一番印象的であり、特長的だったのは、主体的に行動し、貪欲にすべてを学ぼうとする姿勢に他なりません。それは6月の富士吉田研修で学んだものです。研修は富士吉田を中心とし、一泊二日で行われ、タスカルーサ市から訪問した高校生との交流を主とするものでした。生徒は、移動のバスや富士吉田青少年の家で積極的にタスカルーサ市の高校生に話しかけていました。後日その時の感想文を読んでわかったのですが、会話がうまくいかない生徒は青少年の家の体育館でスポーツ交流をがんばったそうです。スポーツは国境を越えると書いていた生徒の感想が実に印象的でした。さまざまな形で主体的に交流をしようと努める姿勢は好感を持つことができました。そのような生徒の集まりでしたから、実際にタスカルーサ市を訪問したときの成功は事前に予測できたことはいまでもありません。

話を7月のタスカルーサ訪問に戻します。サザンホスピタリティに抱かれ、いかに充実した日々を送ったかは、先述の通り生徒の感想文に任せるとして、私が今回参加の生徒が素晴らしいと思ったこと、それはまさに「交流」という一言につきます。現地では、すでに日本を訪問したタスカルーサの高校生とは面識があり、再会を懐かしんでいました。また初めて出会った高校生とも積極的に会話をしていました。「あっ、この子は日本に来ていなかったのか！」とあとで気付いたほどです。そして滞在したすべての家族に「うちの家族の一員だ！日本に帰したくない」と言ってい

ただきました。生徒が家庭で担った役割がこの言葉に凝縮されていると思います。

2014 年度習志野市青少年海外派遣事業は無事終了しました。今後このような派遣事業が継続されるなら、今回参加した生徒が後輩たちのために力を貸してくれるはずで、それが毎回積み重なり、習志野市とタスカー

サ市の姉妹都市提携がさらなる発展、深化をとげていくのではないかと、今後が楽しみでなりません。

末筆ですが、今回派遣団として参加させていただき誠にありがとうございました。今回の経験が教職にも役立つよう精進してまいります。